

交通社会の中の高校生

交通安全教育は、生涯にわたって体系的に行うことで効果を上げます。なかでも新しい交通手段を使い始めるときに行う交通安全教育はとくに重要です。

高校の3年間でいえば、移動範囲が広がるとともに、移動手段にも新しく二輪車、四輪車が加わってきます。新しい交通手段を使い始める前に、あるいは活用の仕方が変わる前に、正しい乗り方や使い方について教えることが大切です。

どんな事故が多いか

高校生年代は、交通事故が多く発生する時期です。15～19歳の死亡原因を見ると、交通事故(25.4%)は、1位の自殺(28.5%)に次いで2位。3位は悪性新生物(10.0%)です。(厚生労働省平成19年)

高校生が直面する事故は、

- 新しい交通手段を使い始めてからの事故→二輪車、四輪車の初心者事故
 - 移動範囲が広がり、活用度が高くなることで増える事故→自転車
- さらに、
- 四輪車に同乗中の事故

などです。

この年代に最適なタイミングで交通安全教育を行うことは、生徒の生命を守る上でも、モラルの高い交通参加者を育成する上でもきわめて重要です。

交通安全教育で大切なこと

自転車、二輪車、四輪車運転中の事故といった高校生に多い交通事故の防止では、運転操作の仕方に注意や関心が向けられがちです。

自転車も車も、認知→判断→操作というプロセスの繰り返しで行われます。適切な運転操作スキルは事故防止上もちろん不可欠ですが、多くの研究から、「認知」や「判断」のスキルと、それらに影響を与える心理的・社会的要因や安全に対する考え方の方が重要であることがわかってきています。

リスクを犯す、ルールを破る、欲求不満をぶつける、友達にいいところを見せたい、といった若者特有の心の動きや、危険がわからなかったなどの知識不足も、認知→判断→操作のプロセスに悪い影響を与え、交通事故の一因となっています。

学校の授業を通して、よりよい交通社会人としての生き方を学んでもらうことは、大きな意味を持っています。